

平城宮・京出土の遊戯具 (1)

1 はじめに

平城宮・京の発掘調査では遊戯に関連する遺物が出土している。このうち盤上遊戯に関する賽子、碁石、樗蒲(かりうち)盤を主たる対象として未報告資料の整理と既報告資料の見直し作業を実施しており、その成果について報告する。

2 平城宮・京出土の遊戯具

賽子 平城宮・京から出土する代表的な遊戯具として賽子がある。賽子には六面体と棒状の二種の形態が存在する。

六面体の賽子は現代のサイコロと同じ形態である(図242)。1～4は一辺約1cmの正六面体を呈する。いずれも木材の端材を利用して成形する。対面する目の和が7になる個体(2・3)とならない個体(1・4・6)¹⁾が存在する。1は目を刻した後、墨を入れ、2～5は目を墨書する。5は五の面のみの切片。6は一辺4.9cmと大型で、角材の端を切り落とし、各面に先端の鋭利な工具

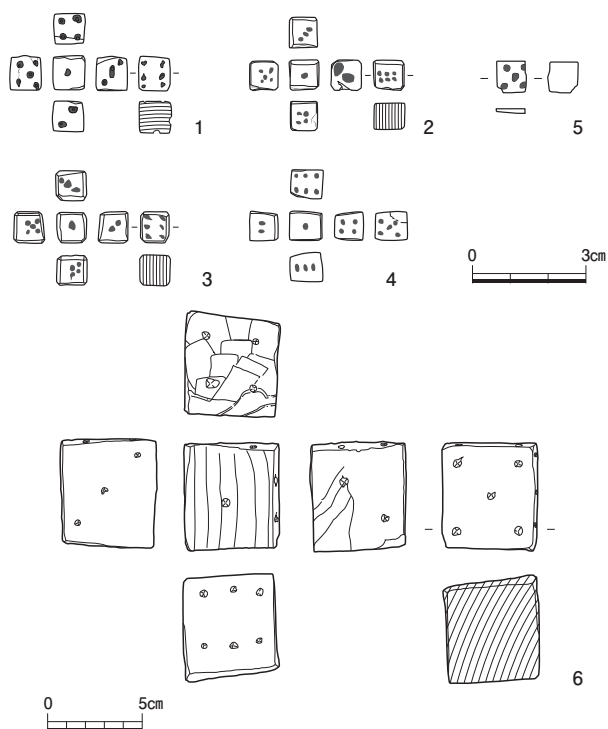


図242 平城宮・京出土賽子(立方体タイプ) 1:2 (6は1:4)

で目を刻す。1は左京三条二坊八坪二条大路濠状遺構SD5100、2～6は平城宮東方官衙地区SK19189から出土した。

棒状タイプの賽子は側面を面取りした六角柱状の形態で両端を尖らせる(図243-1～3)。1・2は各面に漢数字を墨書するが、3は「一・三・五」のみで他の面に墨書はない。また図243-4は八角柱状を呈し、各面に1～8本の刻線を順に刻む。両端は平坦に整える。これも棒状タイプの賽子の一種と考えられる。1は左京二条東一坊大路西側溝SD4951、2は左京三条二坊八坪二条大路濠状遺構SD5100、3は左京二条二坊十一・十四坪境小路東側溝SD02²⁾、4は左京三条二坊東二坊坊間路西側溝SD4699から出土した。

算木状木製品 刻線や墨書のある角柱状の形態を呈する木製品。改良型の「算木」と考えられているが³⁾、棒状タイプの賽子と形態的特徴がよく似ていることから、算木状木製品と仮称してここで報告したい(図244・245、表32)。

算木状木製品には長さ、端部形態、各面の刻線や墨書の数にバリエーションがある。長さをみると、1.9～6.3cmと幅があり、3.2～4.9cmにまとまる。各面には刻線(14例)および墨書(3例、1・3・13)によって異なる数が

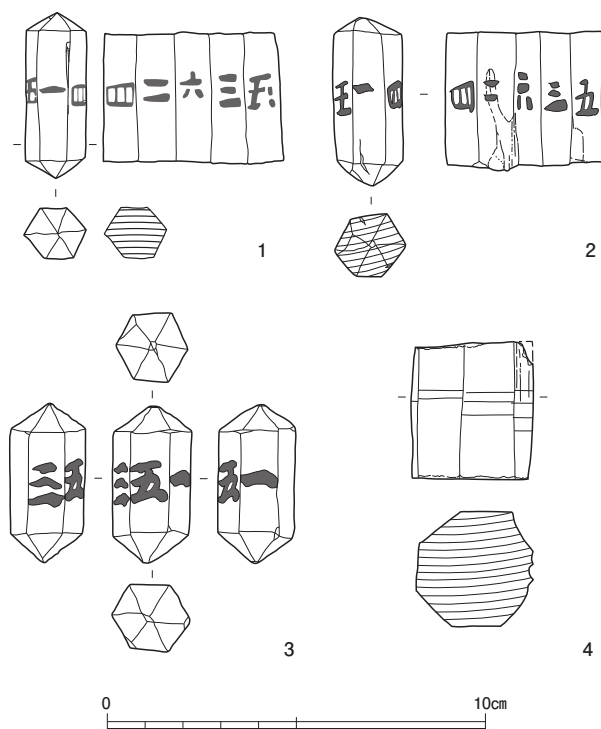


図243 平城宮・京出土賽子(棒状タイプ) 1:2

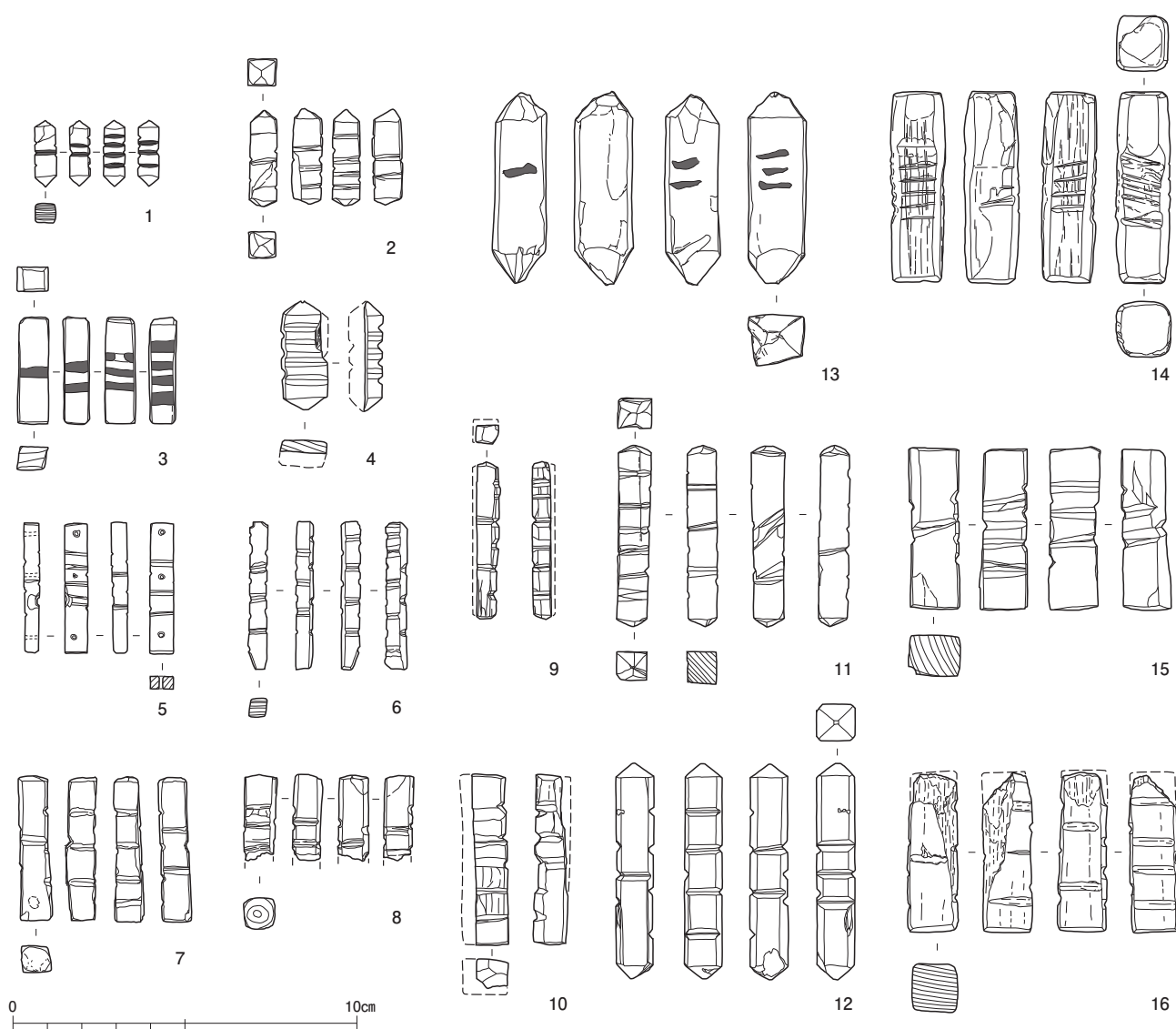


図244 平城宮・京出土算木状木製品 1 : 2

表現されている。各面に記された数に注目すると「1・2・3・4」が8例と主体を占めるが、「1・2・3・6」と刻む11のほか、6本（9）や5本（6・10・14）の刻線を刻む例もあり、一様ではない⁴⁾。また6のみ「3・3・4・5」と刻線の数に重複がある。

刻線には太さに差異がみられ、刀子状の工具により両側から切り込みを入れて刻すものが多く、断面がV字形または逆台形を呈する。両端の形態をみると、先端を削り出して四角錐状に尖らせるタイプ（6例）と平坦に整えるタイプ（9例）がある。また、断面形態に注目すると長方形を呈する5を除き⁵⁾、およそ正方形をなす。5は長方形の断面形態のほか、3ヵ所に直径約1mmの穿孔を施す点で異例である。

平城宮・京から出土する算木状木製品の特徴は以下の4点である。①側面を面取りして角柱状の形態を呈す



図245 平城宮・京出土算木状木製品

表32 平城宮・京出土算木・木製品

調査回数	遺 構	長さ(cm)	端部形態	刻線／墨書	数	出 典
1	204	SD5300	1.9	角錐	刻線・墨書	1・2・3・4 『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』PL.213-94
2	200	SD5100	2.8	角錐	刻線	1・2・3・4 『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』PL.199-286
3	200	SD5100	3.1	平坦	墨書	1・2・3・4 『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』PL.199-285
4	204	SD5300	3.2	角錐	刻線	1・3・4 『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』PL.213-94
5	44	SD5788	3.8	平坦	刻線	1・2・3・4 『木器集成図録』PL.44-4404
6	32補	SD4100A	4.3	平坦	刻線	3・3・4・5 本報告
7	274	SD17650	4.2	平坦	刻線	1・2・3・4 『年報1998-Ⅲ』図10-9
8	404	SE950		平坦	刻線	本報告
9	22南	JE34土器溜	4.6	平坦	刻線	2・6 本報告
10	281	SD7090	4.9	平坦	刻線	3・5 本報告
11	13	SK820	4.3	角錐	刻線	1・2・3・6 『平城報告Ⅶ』PL.73-161
12	22南	SK3139	6.3	角錐	刻線	1・2・3・4 『木器集成図録』PL.44-4402
13	301	SD5200Bb	5.6	角錐	墨書	無・1・2・3 『年報2000-Ⅲ』図8-2
14	315	SD3825	5.6	平坦	刻線	(3)・4・5・(6) 『平城報告ⅩⅦ』図版134-200
15	245-01	SD16040	4.7	平坦	刻線	1・2・3・4 本報告
16	337	SB18500-E1	4.6	平坦	刻線	1・2・3・4 『平城報告ⅩⅦ』図版128-113

表33 平城宮・京出土基石

調査次数	遺 構	長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	色調	
1	168	SE1550	1.2	1.1	0.4	1.0	白
2	168	SE1550	1.3	1.2	0.8	1.9	黒
3	179	柱穴（土坑）	1.3	1.3	0.3	1.0	黒
4	179	柱穴（土坑）	1.3	1.1	0.5	1.1	白
5	179	SE1867	1.3	1.2	0.5	1.2	黒
6	440	SK19189	1.1	0.9	0.5	0.8	白
7	440	SK19189	0.9	0.9	0.6	0.8	黒
8	440	SK19189	1.1	0.8	0.5	0.7	白
9	440	SK19189	1.1	1.0	0.5	0.9	白
10	440	SK19189	1.1	0.8	0.5	0.7	白
11	440	SK19189	1.2	1.1	0.4	1.0	白
12	440	SK19189	1.2	1.1	0.6	1.2	白
13	440	SK19189	1.3	1.2	0.6	1.5	
14	440	SK19189	1.3	1.2	0.4	1.0	黒
15	440	SK19189	1.3	1.2	0.8	1.8	白
16	440	SK19189	1.2	1.0	0.5	1.1	
17	430	SK9240	1.6	1.3	0.7	2.4	白
18	430	SK9240	1.7	1.2	0.6	1.8	白
19	172	SD2700	1.4	1.3	0.4	1.3	黒
20	204	SD5300	1.3	1.2	0.4	1.0	黒
21	254	SB6595	1.3	1.3	0.5	1.4	白
22	372	SX8889	1.6	1.4	0.3	1.1	白
23	524	SD10580	1.3	1.2	0.5	1.4	黒
24	571	SD7100A	1.5	1.1	0.2	0.8	黒

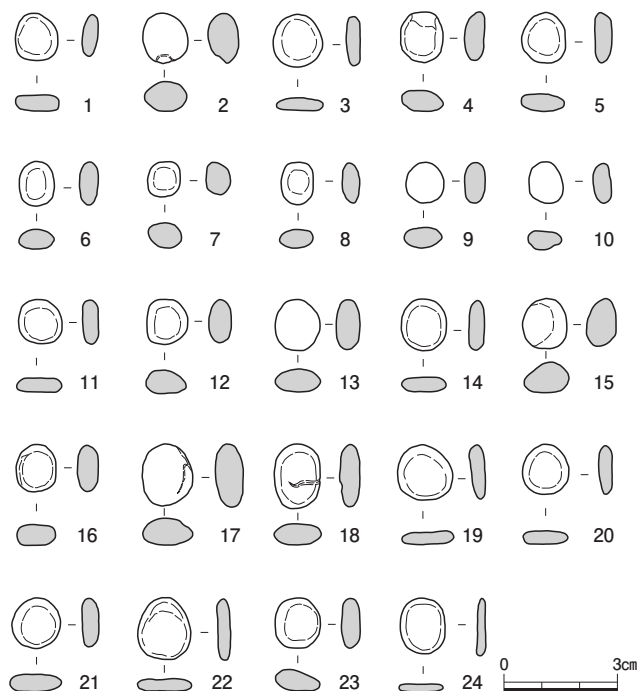


図246 平城宮・京出土基石 1:2

る、②刻線や墨書による各面で異なる表示・記号が存在する、③両端を四角錐状に尖らせるタイプと平坦なタイプがある、④長さ・大きさが多様である。これらの特徴は上述した六角柱や八角柱状を呈する棒状形態の賽子と共通する。算木・木製品の用途については、かつて「骰子形木製品」と報告されていたように(『平城報告Ⅶ』)、棒状の賽子の一種である可能性を排除せず、なお検討を重ねる必要がある⁶⁾。

基石 丸みを帯びた天然の小石。これらの小石の中

には基石のほか、双六子をはじめとする別の遊戯の駒として使用されたものや遊戯具とは無関係のものも含まれる可能性は否定できない。しかし、藤原京右京三条三坊から平面形態が楕円形や不整形を呈し白・黒色を呈する小石がまとまって出土しており、基石の可能性が高いとされている⁷⁾。そこで、この小石に形態・石質が似るものを抽出し、古代に属する遺構から出土した24点を図示した(図246・表33)。

平面形をみると、いずれも角がなく丸みを帯びてお

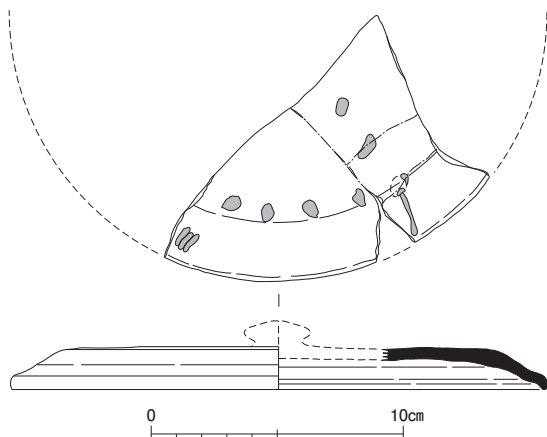


図247 平城第43次調査SD4951出土列点墨書土器 実測図は1:3

り、楕円形もしくは不整円形を呈する。長径は0.8~1.7 cmで1.3cm前後のものが多い。厚さは0.2~0.8cmで、断面形は扁平なものと厚みをもつものがある。なお、厚みをもつものでも、接地した時に安定する面を有する点が共通する。色調は白色と黒色に分かれるが、13と16は灰味がかり白色とも黒色とも判断しがたい。

基石や駒の場合、単独ではなく複数で使用される場面が多いと想定されることから、同一遺構から似た形状・大きさをもつ小石が複数出土する場合は、遊戯具の可能性を検討する必要がある。

列点墨書土器 檮蒲の盤面とみられる列点記号を記す土器。平城宮・京ではすでに4例を確認しているが⁸⁾、今回新たに平城第43次調査SD4951から出土した須恵器杯蓋を確認した(図247)。須恵器杯蓋の頂部外面に墨点で列点記号を記す。檮蒲の盤面となる列点記号の外周列点と放射状列点の一部にあたると考えられる。

3 まとめ

本報告では平城宮・京出土の遊戯具のうち、盤上遊戯に関わると考えられる遺物について報告した。これらは木片や土器を簡単な方法で加工・転用し、天然の小石を利用するなど身近な材料を用いている点に特徴がある。これは正倉院宝物に残された精巧な遊戯具とは対照的な奈良時代の遊戯具の一端を示している。今後も出土遊戯具の整理と検討を続けたい。

なお本報告は、2018年度公益財団法人中山隼雄科学技术文化財団研究助成の成果の一部を含む。(小田裕樹)



註

- 1) これは賽子の対面の和が7に定型化する以前の特徴とされる(増川宏一『さいころ』法政大学出版局、1992)。舶来とみられる正倉院宝物の象牙製骰子や図242-2・3は対面する和が7となることから、奈良時代の賽子は定型化したタイプと定型化していないタイプとが混在していたと考えられる。
- 2) 奈良市教育委員会「平城京左京二条二坊十一・十四坪境小路の調査 第151次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和63年度』1989。図は再トレースをおこなった。
- 3) 内山昭『計算機歴史物語』岩波書店、1983。奈文研『木器集成図録 近畿古代編』1985。
- 4) 14は刻線が薄く、3本と6本とした刻線については不明瞭である。
- 5) 4は断面図で長方形に復元しているが、欠損のため本来の断面形状はわからない。
- 6) 算木状木製品を「算木」とみることに対し、すでに懐疑的な見解が提示されており(鈴木景二「算木と古代実務官人」『木簡研究』18、1996。山本忠尚「算木と骰子」『中国文化研究』27、2011)、古代インドやパキスタンの出土事例を根拠として投げ棒型のサイコロとする評価もある(前掲註1増川文献)。また、中国唐代の偃师杏园唐墓M1025からは石製の六面体賽子と四角柱状の賽子が一括出土しており、同一遺跡からは算木状木製品に形態が似る「滑石握手」という滑石製品が出土している(中国社会科学院考古研究所『偃师杏园唐墓』科学出版社、2001)。算木状木製品の性格を考える上で注目される。
- 7) 松村恵司「藤原京の「基石」」『季刊明日香風』65、財団法人飛鳥保存財団、1998。竹田正敬「藤原京右京三条三坊東北坪出土の基石」『遊戯史研究』10、遊戯史学会、1998。
- 8) 小田裕樹「列点を刻した土器」『紀要 2015』。同「盤上遊戯「檮蒲」の基礎的研究」『考古学研究』63-1、2016。小田裕樹・芝康次郎・星野安治「一面を削った棒」『紀要 2016』。